

長野県コミュニティスクール検討会 発言要旨

日 時 令和6年9月3日(火) 午前10時～正午

場 所 オンライン開催

出席者 上沼 昭彦、河西 哲也、塩原 雅由、城村 義人、傳田 智子、早坂 淳
伴 美佐子、堀田 茂樹

1 開会

○市村課長

それではただいまから第5回コミュニティスクール検討会を開会いたします。進行を担当させていただきます生涯学習課の市村です。よろしくお願いいたします。

本日ご参加の皆様におかれましてはご多用中のところありがとうございます。この検討会は全体で5回ということで予定をしておりました。

本日が第5回目の最終回ということになります。どうぞよろしくお願いいたします。

3 協議

○市村課長

それでは早速、意見交換の方に入ってまいりたいと思います。ここからは早坂座長様、進行をお願いいたします。

○早坂氏

コミュニティスクール検討会委員の皆さん、事務局の皆さん、またストリーミング配信ライブでご覧になっている皆さん、こんにちは。早坂でございます。

この会議もあつという間に第5回を迎えます。本日が最終回となりました。これまで4回にわたって、それぞれの委員の皆さんのお立場、専門、ご経験をフルに生かした形で熱い議論をここまで重ねてきました。コミュニティスクールは一体誰にとってどんないいことがあるのか。ここをそれぞれの立場でしっかりと言語化をしていただいたところです。

本日は最終回ということで、これまでの議論を踏まえつつ最後にこれだけはどうしても言っておきたいというお言葉を委員の皆さんお一人お一人からしっかりいただけたらと、そのようにも感じております。いつにも増して忌憚のないご意見、かつそれぞれのご経験に根ざした熱い思いを届けていただけたらと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

本日の議題はいつもと同じように二つでございます。一つ目は事務局からこれまでの議論の振り返りをしていただきます。残った時間につきましては委員の皆さんからしっかりお言葉をいただく時間にしていきたいと、そのように感じておりますのでよろしくお願いいたします。

では事務局説明に移ります。説明よろしくよろしくお願いいたします。

○事務局

それでは事務局より長野県におけるコミュニティスクールを、これまでの振り返りという形でご説明させていただきたいと思います。

第4回コミュニティスクール検討会の概要についてご説明させていただきます。第4回検討会でいただいたご意見を大きく分けさせていただくと、三つに分けられるかと思えます。

「学校運営参画のメリットとは」、「学校・地域にどんな支援が必要か」、そして「学校運営参画の充実を図るためには」、の3点です。

学校運営参画のメリットとしては、地域から「ありがとう」などの本気のフィードバックが子ども達の自己有用感を高め、次の活動へのエネルギーとなり、学びのサイクルを回していくこと。また、学びのサイクルが回ることで、先生方だけでなく地域の人も子ども達も一緒にカリキュラムを作っていく状況が自然と生まれる。また、地域・教師にとって形式的な参加の段階では負担でしかないが、ステージが上がリ、対等な参画の段階までいくと、地域の方々がどんどん参加するようになるので負担はかなり軽くなるのではないかと。地域連携を単独で考えていると負担感は増してしまう。生徒や先生方が「やってよかった」というプロセスへ繋がっていくことで有用感を感じ、更なる活動の意欲に繋がる。有用感が働き方改革にも繋がっているのではないかと。といったご意見をいただいております。

学校・地域への支援のあり方については、学校・地域それぞれの視点からご意見をいただいているところであります。

学校への支援といたしましては、必要感に対する疑念が根っこにあると負担感は拭えない。必要感を先生方に感じてもらうアプローチが必要なのではないかと。地域の方が学校運営に参画していくことも重要だが、子ども達が学校運営に参画すべき。まずは先生方と子ども達が対等になることが学校を開いていく第一歩ではないかと、といったご意見もいただいております。

また、地域の視点からは、ハード面からのアプローチも必要。地域の方がいつでも学校の中に入れていけるようなコミュニティルームの設置は一つの方法ではないかと。学校、子ども達にとって必要とされていることが地域住民にとっての自己有用感に繋がる。学校と地域の方々がコミュニケーションをとれるような場や機能が充実することで、コミュニティスクールの取組は大きく変わっていくのではないかと、といったご意見をいただいております。

支援のあり方の一つとして、コミュニティスクールの必要感を感じてもらうためにはどうすればよいかといったことも話題として挙がりました。

地域の方と繋がるということは先生方にとっては未知の世界であることが多く、スタートで負担感を感じる先生方はいる。しかし、地域の方に認められ、本気のフィードバックを受けた子ども達がやる気になって頑張っている姿は先生方にも伝わってくる、といった子どもの姿に先生方の変化が生まれてきている様子や、先生方の負担感が充実感あるいは有用感に変わっていくプロ

セスには、子どもの変化、目が輝く、学びが深まっていく、ということが不可欠なのではないか。

また、複数年に渡ってコミュニティスクールに関わる人が数人いると、ステージの段階は上がっていく可能性はあるが、地域住民の方々にも「私達がみんなで子どもの育ちを担っているのだ」という意識がどのようにしたら広がっていくか、持続可能な形になっていくか、といった地域の方々の方々の視点からのご意見をいただいております。

検討会終盤では、信州型・国型も含めて、学校運営参画の充実を図るためにはどのような取組が考えられるかについてご検討いただきました。

地域と共にある学校をつくるためにはどうしていくことが望ましいかは、市町村教育委員会、また県教育委員会も含めて考えていくべき。全ての学校が信州型コミュニティスクールになったからそれでいいという話ではない。信州型コミュニティスクール自体も常に進化していかなければいけないのではないか。

関わる人全てが当事者意識を持って前のめりに参加してもらうためには、その相手にこれまでなかった権限を渡していく必要があるのではないか、といった「はしご論」の考え方もご紹介いただきました。

学校を開くことは現状ではハードルが高い状況であり、学校を開くことへの警戒感もある。だからこそステップを上った先に、こういう学校があるといった学校像をきちんと見せていくということが必要なのではないかとといったご意見もいただいております。

今回で検討会は最後となります。これまでそれぞれのお立場や多様な視点からのご意見、大変ありがとうございました。第4回検討会では時間が迫ってしまい、十分にご意見をいただけなかった方々もいらっしゃいました。

そこで今回は出席者の皆様に長野県のコミュニティスクールを進化させていくために今必要なことは何か。これまでの検討会でご意見いただいたことも含めて最後にそれぞれのお立場からご意見をいただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

○早坂氏

ただいま事務局より第4回を中心にこれまでの議論をおまとめいただきました。これを振り返って改めて感じる所、皆さんいくつかあるかと思いますが、私の中には実に多様なご意見をいただけているということがまず最初に浮かびます。それだけ地域と学校との関わり、あるいはその関わりを通じた子どもへの教育、地域作り、学校作りというのは実に多様な顔を持っているということだと思います。それぞれのお立場から見える現実がこれだけ異なる中で、第5回はどのようにこれを落としていこうかというところになりますが、ここは一つに我々の答えを集約するよりも、先ほど申し上げた地域と学校との関係性における教育がどれだけ複雑なのか、どれだけ多面的で立体的な形をしているのか、その姿を明らかにすることを今日の落としどころに持っていったらと思います。

委員の皆様にはいつも以上に、ご自身のお立場、ご経験、ご経歴から見える現実を余すことなく出していただきたいなど。その出されたものをそれぞれ集めて、我々が今語ろうとしているコミュニティスクール、地域と共にある学校作り、学校を核とした地域作りの複雑さを全員で共有して終わっていきたいなと思っております。

まずは、堀田さんからお願いできればと思いますが、よろしいでしょうか。

○堀田氏

前回、生涯学習課から出された参画のステージ、これまでの検討会のお話、また早坂先生のいろいろなお話を自分が聞き、自分の前任校である長野市の松ヶ丘小学校で2年間実践したこと、これらがこの検討会の4回で自分の中で繋がって落ちてきたので、それを共有させていただければありがたいと思っています。

松ヶ丘小に赴任したときに、コミュニティスクール運営員会をまず行ったのですが、最初の参集が評議員と区長さんとPTA会長の9名のみでした。そこでは活動報告と各活動が広がって欲しいということと、今までこういう活動してきたのでまたお願いしますという形で運営委員会が進んでいきました。これは参画のステージの「形式的な参加」の段階だったと思います。コロナもあってなかなか発展しなかったということもあると思います。

そこで自分の方でももう少し思い切って楽しい活動にできないかなということで、以前話しましたけれども、ちょっと無理な活動でもいいのでいろいろ提案してみますとこのように、これは絶対無理だろうというものもたくさんあるのですが、自分でもワクワク感が出てくるとありがたいなと思っていろいろ提案してみたところ、「それもある、できる」と委員の方が乗ってきてくれました。この年の学校評価は、保護者のプラスの評価が56%しかありませんでした。やはりなかなか難しいなど、コロナ明けで難しいところもあったなと思います。ここを何とかしたいなと思いついて次の年、取組を始めました。次の年の第1回の運営委員会には前年から関わってくださった方を参集して人数を増やしました。さらに、学校長の学校経営のビジョンを話してもらった後に、担任の先生みんなに参加してもらい、そこで構想を発表してもらいました。ここで地域の方に必要感が伝わったなど。とても良かったところかなと思います。

北信教育事務所からもいろいろな場面で紹介していただいて、活動が広がっていきました。

その会のすぐ後に地域の方も早速動いてくださって、サツマイモを全校で作って焼き芋大会をしたいという要望に応じて、すぐ荒地を地主さんに借りてきてもらったこと、このすぐの動きもとても良かったなと思います。そして委員長さんの呼び掛けで、みんなが休日に集まって地域の方が畑を耕してくださるという活動ができました。ここからさらにシニア活動推進コーディネーターさんにもうまく繋がって、地域の方を紹介していただく。ここもとてもありがたかったです。これで活動が一気に広がったところもあります。地域の方がさらに違う方を連れてきてくださって、さらに活動が広がっていきます。さらに灯明祭りのスーパーバイザーさんが回ってきた時に、学校では是非という話でいろんなことで繋がっていき、畑のこと+花壇、ヘチマ畑、そんな

こともアドバイスをいただいて活動がさらに広がります。評議員さんが、是非学校と地域で土砂災害の避難についてお話したいということで、みんなで熟議をしてタイムラインが出来上がっていきます。これも地域の方からの呼びかけで出来上がってきました。さらには公民館長さんに講師の先生を紹介していただき、職員が地域巡りを子どもたちにおろしていこうと、子ども達が地域を知る機会にもなりました。

一方、やはり活動していくと課題がたくさん出てきました。地域からは要望がたくさん出てきます。こうして欲しいというのがありますが、学校からは逆に時間が限られていてそこまでできないとか、どんどん地域の方やったださるのですが、子どもに活動をやらせることによって双方向の課題もたくさん出てきましたけれども、取りかかりなのでたくさん課題が出てきていいのでそれをみんなで解決していきましょうということで進んでいきます。さらに連絡方法をどうしたらいいかということでグループLINEを作りました。これが一気にリアルタイムで広がるとても良い手段でした。

さらに次の検討委員会にはどんどん来ていただく方を増やし、参加人数を増やしていきます。また担任からの構想も話してもらったりします。会が終わるといろいろなところですぐ立ち話が始まり、さらに学校と地域の方だけではなくて、地域の方同士の繋がりが横の繋がりがどんどん広がっていきます。これもいい機会だなと思いました。

そして、是非、その畑で作ったもの、焼き芋大会を地域の方をお呼びしてやりたいということで、そういう結びつきができていきます。取組をとにかく地域の方に発信するということは常にしておりました。交流ルームという部屋を一つ作りましたが、そこに作品を展示したり、さらにここに来て遊びをやってくださる方もいて、本当にいろんな方と繋がって活動が活発になっていきました。子ども達は、是非地域の方にお礼をしたいという願いがありました。収穫した大豆で地域の方にお礼をしたいということで子ども達は地域の方をお呼びして感謝の会を開きます。地域の方からもプラスのフィードバックが返ってきて、「子どもの笑顔がとても地域の宝になっている」とか、「もっと近い存在になればいいですね」とか、「顔を覚えてもらいました」とか。地域の方からもフィードバックが返ってきて、それを子どもに下ろすとさらに子ども達がとても喜んで、次の活動のエネルギーになっていきます。

この年の学校評価は2年目ですが56%から83%になりました。おうちの方にも保護者にも地域の方にも伝わったのではないかなと思っております。

ということで地域から子どもにプラスのフィードバックが返ってくると、子どももとても必要感をもってさらにやりたいというエネルギーになっていくと。河西先生の資料からちょっと抜き出させていただきましたが、まさにこの部分が体験できました。

こうなると、参画のステージは1から2に上がって自主的な参加というものがすごく広がっていきます。そして現在ですが自分は離れてしまったのですけれども、昨年まで自分はコーディネーターをやっていましたが、是非地域の方にコーディネーターをやってくださいということで3

名の方をお願いして引き受けてもらっています。今は、本当に地域の方が自主的にいろいろな活動をしてくださっています。LINEでどんどん情報が飛び交っています。地域の方が自主的にやっ
てくださっています。現在の段階を見ると、かなり対等な立場まで引き上がってきて活動されて
います。

早坂先生の資料ですが、ウェルビーイングを支える三つの心理的ニーズのまさに繋がりとか、
子どもと地域の有用感とか、そして自律性などが出てきてこれだなというのが自分の中にパンと
落ちました。

さらに三つのポイントを教えてくださったのですが、最初現在地がありましてそこがうまくい
かなかったと、それを俯瞰してどうしたらいいかと考えていく。そして楽しいことから活動して
いく。まさに早坂先生が言ってくださったことが実感できました。

自分でこうやって見返してみたときに、まずは学校とコーディネーターとか委員長とか運営委
員会でお話してみたり、そこに担任の先生が加わったりして子どもからの必要感が出てしま
した。そういうことを話してみる機会、そしてこうしたいなという、このワクワク感、十分大事に
していますが、ワクワク感が出てくると活動がすごく活発になると思います。そしてボランティ
アの方の居場所ですね。こういうことで繋がりがすごく大事だなと思ってきました。

こういうことで結びつきを通してすごく活動が活発になってきた。このような段階を踏んでい
けば、特に最初のステップですね。そこをすごく大事にすると活発になっていくことが分かっ
て、この検討会の話が全部繋がって、自分ではこうしていけばいいなというのが少しできたとい
うありがたかったなというお話です。

○早坂氏

現時点で我々が作っているコミュニティスクールの「はしご論」、大きく三つの段階にコミュ
ニティスクール、学校と地域の関係性を、はしご・階段のように位置づけているわけですがれ
ども一番下の形式的な参加からそれが自発的、内発的な参加に変わって対等な参加に変わって
いく、その一連の流れを一つの学校の中で、まさに体感されてきた。この共有はとても私達にと
って大事な宝になるなと感じたところがございます。

今の学校が変わっていく、地域が変わっていくプロセスに合わせて、何かご発言いただける方
がいらっしゃいますでしょうか。

○河西氏

前回、今日の進化させていくために必要なことに関わって国型か信州型かという話もありま
したが、個人的には正直、特に国型を経験したことがないのでどちらがいいとか悪いとか分から
ないと思ったのですが。ただコミュニティスクールが停滞している原因は何かなと思った時に、地
域との連携の仕方が分からないということではないかなと。自分自身もそうでしたし、先生達の
様子を見ていても、地域の方の様子を見ていても、そのように感じたことがあって。そこさえ
分れば、地域連携のコツやポイントが共有されれば国型でも信州型だとしても、停滞というこ

ろからは抜け出せるのではないかと考えています。そのコツだとかいうのは、今の堀田先生の事例を聞きながら思ったのですが、うまくいっている事例の中には必ずあると思います。県でも事例集を出してくださっていました。あの中にもきつとうまくいっている事例の中で必ずあったと思うのですが、ただ、全体や結果、成果だけ見ていると、そのコツが分からないというのがこれまでだったのではないかなと。その一般化できるコツというのは、先ほども使っていたんですけど「子どもと地域の必要感を重ねる」ということではないかなと。こういう言葉で表現してみました。これは、これだけだということではなくて、これ以外にもあるのかもしれないと思いますが、少なくともこの「子どもと地域の必要感を重ねる」というコツについてはうまくいっている。他の方達も語ってくださっている事案の中には必ずあるのではないかなと。今堀田先生がおっしゃっていた話を聞きながら、焼き芋を食べたいっていうね。それは子ども達や学校からの必要感を最初に提示したように思えるのですが、その前に堀田先生ができそうなことを提案している話がありましたよね。「あれもできそうだ」、「これもできそうだ」という話を聞きながら焼き芋に地域の人に乗っかってきたというのはどういうことかということ、地域の人が必要感として子ども達と触れ合いたいとか、一緒に活動したいとか、そういう願いが強くあったからではないかと。それを実現する一つの手立てとして焼き芋というものを選択したということなのかなと。

だから、地域の人にも本気になってすぐに土地を準備してくれたり、必要な人と繋いでくれたりということをごちらがお願いしなくても動いてくれる。地域の本気を引っ張り出すためには、この必要感、地域の必要感があるということを見捨てることはもったいないのではないかなということ。きっと他の事案にもあって、それを分かった上で、例えば県の事例集をもう1回見直すと、もっと理解できるのではないかなという気がするのですが。

こういうポイントを共有するときに、一番最初の方でありましたが、地域連携は何のためにあるのか、その目的の部分ですけれども、子どもの必要感が最大評価されて、この後、次への学習意欲が高まる。自学自習のサイクルを回し始める。子どもの自学自習の力を育むことが、地域連携の先にはあるというこの目的をきちんと理解して、そのために必要なものが地域の方々の本気のプラスのフィードバック。このことによって子ども達は嬉しくなって次も頑張りたいとなっていくという、そこを理解する必要があるってこの本気のプラスのフィードバックを引っ張り出すために何が必要か。必要感を重ねることが必要であると。このようにポイントをまとめてみたということです。加えて言うならばこれらを理解した上で、我々が共有したいのは、地域と学校の役割分担とは何なのか。こういう話を前にも話しましたが、誰も語ってなかった。結局これが分からないから何をしたいのか分からないっていう現状があったように思いますが、私はできるだけ単純、それから無理なくということで、地域は生徒に「君たちの力が必要だ」を伝え、活躍の機会や役割を提供する。学校は地域の活動に対する子ども達の意欲を高め、その活動の価値の自覚を促す。個人の課題を設定するための支援を徹底的に行う。これが学校の役割。これを学校・

地域がそれぞれ共有して進むと、自分達が何をしなければならないかということが分かってくるのではないかなと。

この観点で地域連携は本当に機能するとどんなメリットがあるかということを説明します。一つは学校も地域も共に無理なく取り組める。思考の転換のみで今の体制を活用することが目的なので新たな体制整備を必要としません。そのため負担感がすごく少ないです。それから地域と共にある学校作りの様子がすぐに実感できる。本当に回すと、こちらでいろいろ考えなくても、本気のフィードバックによって子ども達が喜ぶ姿があって、それを見て地域の人も、先生達も喜ぶ体感することがすぐできる。堀田先生はすぐ理解されると思いますが、そういうことです。それから、この間の塩原さんに聞かれたカリキュラムの質問にきちんと答えられなかった気がするのですが、地域に開かれたカリキュラムばかりではなくて子ども達および地域と共に作るカリキュラムが容易に実現できる。これはもう激変すると言っても過言ではないと答え直させていただきたいと思います。先生達だけが考えるカリキュラムではなくて、地域の人達も子ども達もあほしい、こうしたいとどんどん言ってくれるので、その結果としてカリキュラムが作られていくという形が簡単にできます。

さらに地域の方の必要感を介して連携するので、その地域の方がなかなか変わらないですよ。そこに住んでらっしゃいますので同じ人を介して小学校・中学校が地域と関わることがあると。そうすると持続可能であるということ。それから、小中連携・小小連携、そこに書いてある幼保小中高連携も含めて理屈の上では本当に簡単に子ども達の必要感を持って実現できるのではないかな。さらにあまりにも大きな事を言い過ぎるような気もしますが、そういう連続が日常化すると、そう遠くない将来、多くの地域で直面するであろう学校の統廃合。統廃合でどこを残すかという話になったときに、連携した活動が日常的に行われていればどちらを残すとか、なくすかという話ではない議論ができるようになっていくのではないかなと。地域連携にはそういう可能性があるのではないかなということを考えました。

○早坂氏

堀田さん、河西さんと、今、学校現場を支える先生方からコミュニティスクールの意義について語っていただいたわけですが、この二人の話聞いたこの段階で今日もこの検討会に参加してよかった、役得だなと思わざるを得ません。本当に素敵な言葉をたくさんいただきました。印象的な言葉はお二人からたくさんいただいているところですが特に私の中で今の河西さんのお話で残っているのは地域と共にあるカリキュラムというのはとても素敵な言葉だなと思いました。社会に開かれた教育課程、カリキュラムという言い方はよくなされますし、地域と共にある学校作りってということもよくなされますけれども、地域と学校が共にあることで、授業を一緒に作る。以前に教育計画であるとか、あるいは子どもの学びや経験を総体としてカリキュラムそのものを地域と共に作っていくというこの発想がコミュニティスクールの可能性なのだろうなということを改めて教えていただいた思いです。

学校現場の先生方、お二人から今お話しがあったコミュニティスクールをさらに進化させる上で必要なことについてお言葉をいただいたところですが、ここでいかがでしょうか。

○城村氏

今、学校教育現場を支えてくださっている先生方からのご意見があったのでそこに合わせて一言だけ。コミュニティスクールを作っていく中で、先生方はもしかしたら最初に絵を描きすぎているのかなという気も少ししてしまっていて。今、話を聞いていて最初から100点を目指しすぎかなという気もして。河西さんの方からも話があったように地域の方々と皆さんと一緒に作っていくというところの視点は、本当に大事だと思っていて。最初は40点かもしれない、でも次に50点、60点というように、地域の方々と一緒に作っていくということは、そのプロセス、営みにコミュニティスクールの価値がそもそもあるのかなと思っています。先生方が最初に100点の絵を描いて、それを目指す地域の皆さん、そこに人材がいるかないのかで出来ないというところでもし立ち止まっているとするならば、40点からでもいいのではないのでしょうか。その中で地域の皆さんでお手伝いできることがあるのではないのかなと、今お話を聞いていて思ったところですよ。

○早坂氏

冒頭ご発言いただいた堀田さんのお話は、地域と学校の関係性が一番最初の段階から始まっていくそのプロセスがまさに語られているところでしたよね。今、城村さんがおっしゃるような何点というのは少し難しいかもしれないですけど、必ずしも100点ではないところから、やれることから、むしろやりたいことからやっていっていいのだと。ワクワクをベースに繋がれるところから繋がっていきこうと。それがだんだんと広がって階段を上っていくプロセスが見えてきましたよね。階段を上り続けると、先程河西さんがおっしゃられたように必要感と必要感がばっちり重なっていくと本気のフィードバックが子どもに返ってきて、子どもの目が変わって、子どもが変わると、やはり学校の先生方は変わりますよね。やはり子どものことをすごく見てくださっているので子どもが変わることで学校が変わる、学校が変わることでまた保護者が変わる。いろいろな正のポジティブなフィードバックがお互いに繋がりの中で反響し合うような、何かそんなプロセスがあるのかなと。そこを考える上でも今、城村さんがおっしゃってくださったように始めやすいところから、できるところから、フットワーク軽めにやっていくこともまた大事なのかなとも思います。まだまだ地域との関係性はこれからという学校や地域があるのだとしたら、まずはできるところから、あるいは楽しいことからやってみるというのもありなのかとそのようにも思わせていただきました。

では私の方からこれまでの三人の皆さんからいただいたご意見を踏まえつつ感じたことを少しお伝えさせていただきます。

コミュニティスクールを語る時、先程、河西さんの方から地域の必要感、学校の必要感を重ねていくことの大事さを語っていただいたところですが、そもそもコミュニティスクール

というのは誰のために、どんないいことがあるのかというところ。ここの必要感を、やはり私達はもっと声高に地域や学校に向けて語っていく必要があるということ、これまでの皆さんとの議論の中で改めて感じているところです。コミュニティスクールが子どものためにあるものなのか、それとも教員のためにはどうなのか、保護者はどうなのか、地域にとってのメリットは何なのか。学校にとっていいことは何なのか。これまで皆さんとの議論の中で気づかせていただいたことをまとめたものを共有させていただいています。

コミュニティスクールが誰のためなのか、まずは当然子どものためにとっていいということは、多分多くの方がうなずくポイントだろうと思います。ただそうなったときに教員や学校にとってという話になった時に、どうしても負担感、あるいは河西さんも言われていたような繋がり方がそもそも分からないという問題が出てきますよね。

新たなコミュニケーション、新たな複雑な利害関係の調整が、ただでさえ保護者や子ども達との関係、あるいは職員同士の関係性の中で難しさがあるのに、そこにさらに地域との関係性の難しさを加えられたらたまらない、日々忙しすぎるという感想をお持ちの学校現場の先生方も少なくないのかもしれないと、そのように感じます。

保護者や地域にとっても同様に、PTAの活動は城村さんもいろいろ課題があるというお言葉がありましたけれども、PTAに参加しようとする保護者も同様な気持ちで負担感をまず口に出される方も少なくなかったりしますよね。要は、大人は子どものためであれば負担を甘受せよということなのか。ここに一つ、コミュニティスクールを進めていく上での大きな壁、論点があると私は感じています。当然大人なので、子どものために、次世代のために、未来のために、今私達がやることを精一杯やると、これ大人の仕事だということは皆さん当然そうだとおっしゃっていただけたらと思うのですが、あらゆるものを子どものために、未来のためにと抱えてきた日本の学校が今背負ってしまっている荷物、質と量含めて、その多さ、複雑さはもう世界に比較してもとんでもないことになっていることは皆さんOECDの調査等でご存知かなと思います。

これ以上負担を抱え続けるわけにもいかないという学校現場の現状がある中で、コミュニティスクールの良さが子どもにとってあるということだけで、やはり推進は難しいだろうなと思います。でも私はコミュニティスクールが決して子どものためだけのものだとは全く思っていないで、コミュニティスクールの様々な階段を上がっていくプロセスを体感している人達の目が輝いていく、その時間の経過と共に人が光っていく。その姿をたくさん見てきた身としては、コミュニティスクールは当然子どもにとってもいいのだけれど、教員や学校、保護者や地域にとってももちろん良いものなのだと。逆にここが学校の先生に、あるいは地域の人に腹落ちしてないとコミュニティスクールは進んでいかないだろうなと思っています。

そうやってきた時に良さとは何なのか、教員にとっての良さ、学校にとっての良さ。良いとはそもそもどういうことなのかが通らなければいけないわけですけど、これについては長野県教育振興基本計画が旗として掲げている「ウェルビーイング」ということで良いと思うのです。精

神的、社会的、身体的に私達が良い状態にあるということ。幸せだとすごく強く実感するというよりも何かお風呂に入った時にほっとするようなあの感覚、あれが日常の様々な場面で実感として、どの立場の人が持てる。これが今、長野県が5年間の教育振興基本計画の柱に打ち出しているものの中心的な魂だと思っています。子どもにとってのウェルビーイングだけではなくて、当然ここには社会全体のウェルビーイング、つまり学校も先生も保護者も地域もみんなひっくめて幸せになろうよというメッセージが込められているはずです。そうした時にこのコミュニティスクールはこのウェルビーイングにどう繋がっていくのかということが問われなければいけないわけですが、堀田さんが先ほどご紹介いただきましたように、幸せになるために、つまりウェルビーイングを私達がしっかりと日常的に実感するために押さえていかなければいけない三つのポイントというのは心理学的には結構明らかになってきているわけですね。

これはこれまでのCS検討会の中でも紹介をさせていただきましたけれども、改めて三つのポイントを確認させていただくと、私達はまず繋がりを持たなければいけないというのが一つ目のポイントでしたね。

二つ目のポイントとしては有用感を感じなければいけない。達成感と言い換えてもいいです。何かが出来たぞという感覚ですね。一人では無理だったけれどみんなだったらできたというこの感覚。つまり繋がりの中でできたという感覚を持つということがとても大事。

そして最後、三つ目の柱だと思います。魂だと思いますが、繋がりの中でできたという思い、やりたいからやっているというのが大事です。自律性と言いますが、要は人から言われて、例えば県の教育委員会が首長のトップダウンの強いリーダーシップのもとでコミュニティスクールをやりなさいと、コミュニティスクールは教育的に効果があることが分かっているので、長野県でもこれは市町村問わず全ての540の義務教育段階にある小中義務教育学校全てに国型を入れるというやり方が必ずしも適切でないのは、この自律性の問題があるからです。やりたいと思っている人がやるのと、やらなければいけないと思っている人がやるのとでは、同じ人がやるのであってもそのアウトカム結果に有意な差が出てきてしまうことが分かっています。やりたいと思わなければ駄目です。問題はどうしたらやりたいと思えるのかという、ここがポイントになってきます。

そこで、とても大事な教育学、心理学、社会学をミックスさせた要素で説明させていただくと、やはり主体性。ここをいかに学校の中で、地域の中で、保護者の中で、子ども達の中に育むかということが大事なキーワードになってくるわけですが、主体性というのは今の現行の学習指導要領で言えば主体的・対話的で深い学びというのがキーワードになっていますが、少し残念ながらこの主体性という言葉は、範囲が広すぎるというか、雑なのです。概念としては。教育学であまり主体性という言葉は使えません。主体性にもパターン、類型のタイプが2個ほどあって、どちらの主体性が良いか悪いかというのが自律性との関係性の中で見えてきています。

主体性でいうと自発性と内発性がさらにその内側に分類があり、自発性というのは基本的に外の何かをキョロキョロ見ながら教育委員会がやっているからやらなければと、教育委員会から言

われないけれど教育委員会がこういうこと言っているからやっておいた方がいいだろうなと思って学校が動いたり、あるいは今学校の先生が何か困っているらしい、こういう問題があるらしいけれど地域として学校から直接言われるわけではないけれど何かお手伝いしてあげた方がいいのかなと言って動いている地域も自発性にに基づいています。

内発性は、内側から湧き上がってくるワクワクに駆動されるというのが大事なポイントです。やりたいという思い。いや、やった方がいいかどうかは別です。やるべきなのかどうかも別です。しかし、みんなで繋がりながらやれたという感覚が好きだから、何かやれることを探そうよと。先程の堀田さんの事例もまさに内発の塊だと思うのですけれど、やれるかどうかは別。やるべきかどうかも別です。やりたいかどうかです。

今、子どもの学校での学びは、教師主導の教え込みの学びから、子どもの内側から湧き上がってくる、「知りたい」「分かってほしい」「解き明かしたい」という内発的な動機に基づいた探究的な学びに切り替わっています。小学校であれば1年の生活科や総合的な学習の時間、中学校も総合があって、高校では総合的な探究の時間があります。あれは子どもの内発性を育てようとする試みに相違ありません。私達はこれまでの学校教育の中で、もしかしたら言われたことをやらなければいけない、今やるべきことを歯を食いしばって頑張ることが美德だと思いつている傾向があるのかもしれない。

時代が大きく変わる中でやりたいというこの思いにもう一度立ち返ろうと、今学校がしている時に、地域と学校との関係性も同じように、言われたから、今やるべきだから地域として仕方ないな、学校を支えてやらなければならないという義務感ではなくて何かこんなこと学校でやったら面白いよねと思える地域の人、あるいはこんなことを地域の人と一緒にやったら子どもが喜ぶだろうなとワクワクする先生、こういった人達との繋がりの中でコミュニティスクールが展開することができれば、冒頭で問いとして掲げた誰のためのCSという問いに回答できると思います。

これは間違いなく子どものためであり、学校の先生のウェルビーイングのためでもあります。学校の先生が苦しんで大きな仕事を使命感と共にやってくださっている、人が今いないのもよく知っています。それでも何とか前線を支えてくださっている先生方が、日常楽しいというものに駆動されて仕事ができる。これは今の学校教育が転換しなければいけないとても大きなポイントだと思います。

そしてこのウェルビーイングを学校の先生に実感させるための手段として、あくまでも道具としてコミュニティスクールが有効であると私は考えています。今日、私が是非ともお伝えしたい思いは伝えられたかなと思います。

○塩原氏

これからのコミュニティスクールの推進についてということで、このテーマで今回の検討会で私が発言してきた内容をまとめてみました。コミュニティスクールの推進について考えた時に、教育委員会がどういう動きをするのかということも考えなければいけない。

もう一つ河西さんや堀田さんのお話にもありましたが、学校がどのように対応していくのかということも考えなければならない。

もう一つは地域がどう対応していくのかということですが、地域のことについては伴さんあたりがきつと発言なさるでしょうから、私の方からは控えさせていただきたい。

コミュニティスクールの推進について市町村教育委員会はこれからどうしていったらいいのか。どこの地域でも同じ問題を抱えている。

一つは少子化への対応。それから学習指導要領の円滑な実施と教員の働き方改革のための指導・運営、これはどこの市町村教育委員会でも頭の痛い問題ではないかなと思っています。

この二つの問題を解決していくためには、学校と地域の協働による地域の学校の確立を図る必要があるというのがここ10年間ぐらいでコミュニティスクールを推進してきた大田市教育委員会の考え方。その地域の学校の確立を図るために、いろいろな新たな制度を活用すべきだということです。義務教育学校制度もそうですし、学校運営協議会制度もそうです。まずこのように市町村教育委員会がこれからの地域の子どもを育てるためのビジョンを持つことが必要だろうなと思います。

市町村教育委員会がそのようにビジョンに基づいて学校教育改革を進めたときに、学校はどうすればいいということになります。まずは校長先生が学校内外に開く経営ビジョンに基づく学校作りを実施すべきだろうなと思います。この学校を内外に開く経営ビジョンというのが一つのポイントになります。そのことについては後で詳しく触れます。

続いて、先生方が協働の輪を広げて、教育活動を展開するようになればいいのではないかと考えています。今まで学校の先生は学校の中に閉じこもって、または教室の中での子どもとの関係で子どもを育てようとしてきている向きがございまして、先生方は協働の輪を広げるというアクションを起こすことはとても大事なことになってくると思います。

三つ目に、子どもが学校作り・授業作りに参画する。こういう仕組みを作る必要があるだろうなと思われまして、先ほど早坂さんが誰のためのコミュニティスクールなのかということをお話にしてくださいましたけれど当然子どもです。子どもが一番得をしなければ、子どもが得を得るには他の人達もいい思いをしてなければならない。そういう事実があるはずで、ですから、校長先生がこうする、先生方がこういう教育活動を行う、その中で子どもが学校作り・授業作りに参画できるような、そういう仕組みが出来上がる。これからの学校経営を考えたときに、この三つがポイントになるのではないかと考えています。そういう中であって、コミュニティスクール創世期、この検討会の中では、形式的な参加の段階または第1ステージと呼ばれてきたものですが、私はあえてコミュニティスクール創世期と書かせていただきます。ポイントは三つ。

一つ目は、学校を内にひらくことを重視して、先生方の協働意識を拡大する。これが大事になってくるのではないかなと思います。そこには先生方の協働の中に子どもとの協働ということを入れる。そのために校長先生の経営理念には、子どもの尊厳を守るということを旨とするものを

表していただきたいと思います。これは小学校の校長先生はよくやられる手法です。上に上がって、中学校、高校に行くにつれてそれが薄れていくということがあるのかな。この検討会には河西先生もいらっしゃいますので梓川中学校で子どもの尊厳を守るためにどんな経営理念を置いているのかということもお聞きできればなと思います。

先生方の協働意識の拡大を図る。こんな感じをイメージしていただければと思いますが、まずは内に開くわけですから、子どもとの協働、それから職員間の協働、これは校内における職員の協働と公私を超える職員間の協働が出てくる。こういう内に開かれた学校の中を先生方が、子どもが多様化しておりますので、専門機関との協働、それから地域住民との協働に発展させていけるのではないかと。要するに協働の良さを知らなければ、地域の皆さんとの協働にまで先生方が目を向けることはできないだろうと思います。簡単に言えば、内に開かれてない学校が学校を外に開けるはずがないと思います。

今、大町市の小中学校または義務教育学校の学校運営協議会制度を活用する学校作りの様子を見てみると、その意識がどんどん拡大されているなと思います。参考になればと思ってお話をさせていただきました。

コミュニティスクールの創世期の配慮事項の二つ目としては、学校運営協議会で学校評価を推進する。まず学校と地域の協働によって子どもの学びをどうするかというようなことに着手しても構いませんけど、その前にやはり学校運営協議会の委員の皆様は、学校というところがどういうことを狙って何をしているのかということを知っていることが大事だと思います。そのためには、学校運営協議会での学校評価をきちんと進める必要がある。学校によっては、学校の自己評価を行うために取ったアンケートの分析だけで学校関係者評価を終了させている学校があると思いますけれども、そうではなくて、学校関係者評価を学校運営協議会の委員の皆様が行うというような形にしていけばいいですし、コミュニティスクール創成期にその形をきちっと作ることが大事だと思います。

最後に学校運営協議会委員の研修を充実させる必要がある。このようなことを進めている中で、やはり子ども達が変わってきますので、その子ども達の変容ぶりを地域の人達が見て、そのことによって、学校に対する地域の人々の気持ちを、または意識が変わっていけばいいのかなと思っています。

○早坂氏

自律について特に内側に学校を開いていくという発想については、改めてはっとさせられました。また塩原さんのこれまでのご経歴・ご専門だからこそ言える言葉の一つだったのかなと感じているところでございます。

○河西氏

私、現任校で前任校ほどなかなか進まないモヤモヤ感を持っていて、なぜかと思った時に、前任校は学級総合の形だったのです。しかし、本校は学年総合の形で、動く集団が大きくなってい

るのですが、そうするとそこで意思の疎通を行うのに時間がかかるという、単純にそういうことがフットワークを重くしているなど。フットワークが重いと城村さんの話にあったように、とにかくやってみて修正をかけてということが今とても求められているやり方ではないかと思うのですが、やってみてが始まらないのです。やりながら、修正しながら突き進むということを考えると、動く集団を小さくしてやってみるというのも手かなと実践中で分かったということと、もう一つやはり職員、今塩原さんの話の中にあった研修に関わるのですが、先生方が、例えば先ほどお話をいただいた目的の部分、子どもの学習、自学自習のサイクルを回す力を育むとか。そのために不可欠なものは地域からの本気のプラスのフィードバックだとか。そのために地域と子ども達が必要感を重ねる必要があるんだよとか。学校と地域の役割分担は分けて、理解して共有する必要があるんだよということを先生方が理解しないで動くと結果的にはずっと昔言われた這いまわる活動のようなことになりかねないなということを実践しながら思ったので、やはり理念の部分、塩原さんがおっしゃるように研修の部分では絶対外せないなということについては、今実感しているところであります。

なお地域と学校の役割分担のところ、先ほどそこまで言わなかったのですが、役割分担を共有した上で、コミュニティスクール運営委員会では何をするかという内容に関わって言うと、地域においては、子ども達をどう活躍させるかを工夫し、地域の抱える切実な問題を子ども達と共に解決するというのが支援内容になり、それをどうするかを話し合う場がコミュニティスクール運営委員会の内容になっていけば、それは理想かなと。学校運営協議会でしたでしょうか、前身にあった学校はこんなことやっていますと地域の人に語って評価していただいていたというような会議ではなくて、コミュニティスクールというその手段を通して子ども達にいかに自ら学ぶ力をつけさせていくのかということを考え合う会議になっていくのが理想なのではないかと思っていることも付け加えさせていただきます。

○早坂氏

地域と学校と一緒に考え合うってこのワードとても大事だなと。何か一緒に答えを作るといことですね。学校と地域、それぞれの皆さんが自分の頭で考えて自分の言葉で紡いだ答えを作っていく。それがまた教育課程に織り込まれ、カリキュラムとして動いていくという、そこが大事になってくるのかなというところですかね。

○上沼氏

私は公民館社会教育に身を置く立場の人間ですので、その視点から少し今のコミュニティスクールを見たり、今回お話をいただいている今必要なことについて少しお話をさせていただければと思います。

先ほど早坂さんから誰のためのコミュニティスクールという話もありましたが、当然地域にとってもコミュニティスクールは非常に大切な取組だと思っています。公民館にとってもそう捉えています。公民館は地域が心豊かに暮らせる場であること、将来に渡って持続可能な地域を目

指しています。何よりそれを担う人材を育てていくことがとても大切だと捉えています。その意味で、地域の将来を担う子ども達が自分達の地域のことをしっかり理解してもらい、そして愛着と誇りを持ってもらい、将来的にはその担い手になってもらい、そのような人作りを、このコミュニティスクールの仕組みを使って取り組んでいくことはとても大切なことと思っています。

先ほど先生方から子どもとその地域の必要性を重ねることの重要性をおっしゃられましたけど、私もこのことはすごく大切だと思っています。お互いに思いを共有する場や機会をどのように作っていくかということかなと思っています。学校運営協議会もあります。そこにいろいろな方が、例えばこれまでも子ども達が参加してみるとか、多くの先生に参加してもらおうとか、地域の方もいろんな方々がそこに参加して思いを共有する、そういう場もすごく大切になってくると思いますが、やはり学校運営協議会は年に数回しかやる場合はないので、そこで全ての思いを共有することは難しいかなと思っています。

私がコミュニティスクールをさらに進化していくためにこれから必要かなと思っていることは、これまでのこの検討会で様々な意見が出ていますけれども、一つは意識化。当事者意識をしっかりと持つということ。あとはやはり地域と学校の相互理解ですね。お互いをしっかり理解すること。そこをしっかりとやること。そしてそこを支えていく仕組みとか体制、これを強化していくこと。この三つなのかなと思っています。

学校の先生方の当事者意識というのはこれまでもいろいろこの会議でも出ていましたが、当然学校の教育活動や子ども達の成長を支える地域側の人材の当事者意識もすごく大切になってきます。飯田市のコミュニティスクールの特色は公民館。館長・主事が、学校と地域を繋ぐそのコーディネート役を担うということが一つ大きな特色になっています。

館長・主事、公民館は本当に忙しいため、コミュニティスクールのことだけをやっていられる立場ではなく、いろんな事業をやりながらコミュニティスクールのことやらなければいけないという状況です。

地域側でも学校支援ボランティアですとか、地域には様々な知識経験を持っている方がいらっしゃいますのでそういった方々を上手に巻き込みながら、その方々と一緒になって学校を支えていく仕組み・体制を作っていかなければいけないと思いますし、その方々の意識化がとても大事になってくると思います。

ただ、その必要性だとか理屈だけを確認していても、やはり地域の方はなかなか理解が進まないですし、動くのが難しいと思うので、これは経験しかないかなと思っています。学校の先生方もそうですが、理屈で分かっているだけではなく実際子どもの姿、変容、喜んでいる顔、そういうことを関わった地域の方が見れば、当然やってよかったなとなりますし、地域側の自己有用感、自己満足感が当然高まってきますので意識化はかなり図られると思います。

あと常日頃から学校と地域の風通しの良い関係、それがやはり必要。それがなければ総合的には繋がらないので、それはすごく大切なことだと思っています。よく地区の館長や主事からいろ

いろな話を聞きますが、「ちょうど学校の先生が変わっちゃったからこれまで通り行かなくなっちゃったんだよね」とか「担当の先生が変わった瞬間にちょっと雰囲気変わっちゃった」といった発言があります。やはり地域側からすれば学校が何を望んでいるのか、先生が何を期待しているのかというのを知りたい。できればなるべく早く知りたい。それに向けて準備したいという思いがあります。ですので、当然、館長・主事は学校に行って校長先生や教頭先生といろいろ話をしていますけども、やはりそれ以外に地域の方が普段から学校にいられる、例えば上田市北小学校ですとか、堀田先生からも事例がありました学校の中に地域の方が居れる場所、活動できる場所みたいなお茶が飲めるような場所でもいいと思うのですけども、そういう場所があって、学校って今こうなんだというのを地域の方が肌で感じることができ、学校の先生方も地域の方ってこんな人がいるんだとか、こんなことしているんだとか、分かるような環境を作っていくことが飯田市もなかなかできていないんですけど、やはりこれからは必要で、とても大切になってくるのではないかなと思っています。あとやはり現状の体制でどこまでいけるのかというのはなかなか悩みがあるかなと思っています。将来にわたって持続可能なコミュニティスクール、学校の先生が変わっても、地域の例えば館長とか人が変わったとしても、活動が将来にわたって継続していける仕組みや体制は担保していく必要があるのかなと思います。学校の先生方は本当に忙しいので、コミュニティスクールのことだけをやっているわけにはいかないなので、今は飯田市の場合は教頭先生だとか、コミュニティスクールの担当の先生が学校を取りまとめて、館長・主事と地域の方々を調整する役を担っていますけれど、これは私の個人的な思いですが、学校の中に学校の例えば管理職とか先生以外にコミュニティスクールを担える人材のような、例えば元学校の先生の経験者ですとか、地域の方がそういった学校に入って行って、学校の先生方と普段からコミュニケーションをとって、学校の先生に話を聞いて地域と繋げると。飯田市の場合は地域側は公民館が窓口になっていますので、そこと常にいろいろな話をしながら、そこでなるべく先生方の負担などを軽減しながら、互いの思いを共有しながら一緒になってやっていけるような仕組みというものを作っていければいいかなと思っています。ただこれは人材をどうするか。先生方も不足していますし、先生方も定年延長もしていますし、そういう人材はなかなか地域の中にないねと。そもそもそういったお金はどうするのか、研修はどうするのかも本当に課題はたくさんあるのですが、ただ先々を考えたときにはやはりこういった今までにない仕組みのようなものも考えなければいけない時期に来ているのかなと個人的には思っています。

学校からすれば、学校を開放することは先生方からすればとても勇気があることだというのは地域側もよく理解しています。どのように繋がっていけばいいのか悩んでおられるのも分かりますし、それは地域側も当然同じ悩みを持っているので、今言ったような話をできるところからやっていくしかないのかなと思っています。公民館としては、地域としてはそういう思いに応えていきたいし、そういう人材、また学びの素材はいくらでもあると思いますのでそういうものを上手に掘り出しながら、学校を引き続き支援していけたらいいかなと思っています。

○早坂氏

公民館からのお立場からコミュニティスクール、地域と学校の関係性に向けて実に示唆に富むご発言をたくさんいただいたなと思います。持続可能性というところが一つ大きなキーワードになったのかなと思うのですが、そこにおいて当事者意識をそれぞれが持つことや、相互理解、風通しの良い関係性、それらをまた同時に仕組み化・体制化して、続けていけるような形にしていこうということについても併せてお話をいただきました。

前回伴さんからお話いただいたコミュニティルーム。地域の方が学校の中に常駐できるような関係性というか、部屋を1個用意するだけでその関係性の向上。どうやって繋がっていったらいいかわからないという最初の大きな壁を日常的に挨拶ができる関係性に変えていくという点、このコミュニティルームの存在についても非常に大きなものがあるということをお話いただきました。

最後に学校を開くことは学校にとって勇気がいるという言葉、これは私もすごく響く言葉だと思います。ここにどう私達も向き合いながら、この勇気がいることを後押しできるのかということもまた大事なポイントになってくるのかなというところでしょうか。

○傳田氏

先ほど仕組み化ということや、先生方からの学校現場の話で、教育委員会それから学校で、また現場の先生、それぞれが研修をしたり価値を共有してという、学校側や教育委員会側の仕組みが上手にできた場合、これを地域側へ誰が掘り起こしたり、誰が研修といいますかビジョンを共有するかというあたりも同時に重要で、この二つが揃ったときに合致してくると思うのですが、そうなった時に今、コーディネーターとかいろいろな形でなされていると思うのですが、コーディネーター的な存在を置くことが継続性の担保、それから先生方の働き方改革などの重要なポイントになるかなと思っていて、コーディネーターやその仕組みをどうしていくかということは今後具体化するには議論をしていく必要があるのではないかなと思っています。

皆さんの事前アンケートの中でコーディネーターのこともどのような仕組みにしていっていいかということも書かれていたりするので、ぜひ実践事例として伴さんの素敵な取組もありますし、いろいろな地域の実情があると思いますので、その辺が今後具体化されていくと本当にこの仕組みが実装してくかなと聞いていて思いました。

私もコミュニティスクールにしろ、キャリア教育の関係にしろ、探求にしろ、それは多様な人が関わる仕組みのあり方だと思っているのでどういう形であれ、そういうことが行われて、そうすると地域側の大人もハッピーになっていくというのは皆さんのお話からも、また私の実践の中からも感じさせていただくことなので、私もこの検討会ですごく学ばせていただきましたのでいろんな実践をしていきたいなと思っています。

○早坂氏

仕組み作り・体制作りというやはり最初に思い浮かぶのが教育委員会。行政の仕組み、学校支援のあり方というところに目が向きがちなわけですし、そこも当然大事なわけですがけれども併せて地域側の仕組みをどう考えていくかというのは、確かにこの議論の中では手薄になりがちだったかもしれない。要は現場の自助努力におまかせをできてしまっていたところが、もしかしたらあったのかもしれないなというのを、今まさに地域に根ざして広域に地域を支えていこう、盛り上げていこうとされる傳田さんの立場だからこそ出てきた言葉かなと感じさせていただきました。

またコーディネーターの重要性についてはこれまでも言われていますけれども、改めてこの重要性については、確認ができたところかなというところですね。

コーディネーターはいろいろな方がやられています、やはりこれ以上学校の先生にコーディネーターとしての業務をお願いするというのもなかなか現実的ではない中で、学校とうまく橋渡しができるような、かといって地域の側だけの論理にも寄らずに学校の話もきちんと理解できるような、そういったコーディネーター。言うべきことは言うというようなそんな方が地域にいてくださると、学校の先生はやはり変わりますので、行政の方も異動がありますので常に地域に根ざした人が支えていくという意識はやはり何事においても、教育においても、まち作りにおいても大事な視点なのかなと思います。

○伴氏

5回の皆様と熱い話し合いを経てきたわけですが、一番感動したのは、やはり校長先生というのは夢を語れる人であってほしいなと。今日、塩原先生を始め河西先生や堀田先生。それから何も一言も喋らずに今日は参加してらっしゃいますけれども、武田先生の現役時代の夢を語ってくださった文章を読ませてもらって何度泣いたことか。やはり学校の現場には、夢を語る、こういうビジョンを持った校長先生達がたくさんいてくださると私のようなコーディネーターは「ついていきます」となれるかなと改めて感じました。

そして、その語っていただく夢は私のような人間にも分かる言葉で、小学生でも分かる言葉で語っていただけると、さらに先生達の夢を理解してくださる味方が増えていくのかなと感じました。今日は、私は上田市のコミュニティスクールの生きた化石としてコミュニティスクールに初めて出会ったときの上田市の様子を話したいなと思っています。

今から19年前に上田市で初めて学校支援地域本部事業、かつてのコミュニティスクールの原型と言われているものですが、そのコーディネーターを拝命したときに、実は上田市教育委員会の中で、担当課を学校教育課にするか生涯学習課にするかとても揉めていたのです。お互いに仕事が忙しいから、そんなことやってられないから、「あなた達の課でやって」「あなた達の課でやってよ」という話ですったもんだが1ヶ月くらい続いていました。その時の生涯学習課長の言葉がすごくかっこよくて、「どっちでもいいじゃねえか、子どものためになるんなら」と言って、上田市では生涯学習課がコミュニティスクールの担当として、最初の一步を踏み出し

ました。どっちでもいいじゃないか、やれる人がいて、夢を語る人がいて、それを支える人がいるならというように5回のお話を通して強く感じました。

かつて私は、長野県の社会教育委員として、第3次教育振興基本計画の策定にも関わらせていただきました。今日第4次は早坂先生がご紹介くださったのですが、第3次の際は基本計画の概要というのがA3見開き1枚にコンパクトにまとめられていてそれを委員である私達に示されたのですけれども、実はその5年前の第2次教育振興基本計画と比べて、実は14文字しか違っていませんでした。同じような内容だったのです。私はそのことについて、委員の一人として質問をさせてもらったことがありました。「14文字しか変わってないけど、世の中は社会がこんなに大きく変わっているのに、14文字の変更でいいんですか」と。そしたら教育委員会の偉い方がこう言いました。「教育は100年の計というじゃないか」と。教育は大きく変わってはいけないのだと回答して下さったことがありました。

不易と流行という言葉もあります。教育は変わってはいけないものを保ちつつ、でも、時代に合わせて変えていかなければいけないということが大きくあるのかなと思っていて、だから私達大人は、変わることを恐れてはいけないなど。未来に向けて、それから早坂先生が言ってくださったように、失敗を恐れてはいけないなど。私達大人は100点を目指しがちですが、100点を取れなくても変えていくためにみんなで力を合わせた姿、変わることを恐れない姿を。もっと寛容にみんなで話し合いをして、そして未来に向けてワクワクしながら大人が話をする姿を子ども達に見せていかなければいけないなと思っています。もちろんそのためには教育委員会としての制度設定が必要だと思います。進化していきたいと思っています。なので、今回の検討会がその制度設定に向けて意見を申し述べられるという点では大事な会議だなと思っています。

最後に、昨日ボランティアさんと一緒に防災訓練を北小学校でしていたのですが、その時のボランティアさんの一言がとても心に残ったのでお伝えして私の話を終わりにしたいと思います。その方は本当に学校にボランティアとしてたくさん入ってくれて、この10年来、子ども達と関わってくださっています。その人が昨日の帰り際に一言「俺達の活動はコミュニティスクールじゃないのかい？」と言いました。それはどういうことかということ、文科省が発表したコミュニティスクールに取り組んでいる学校の中に上田市立北小学校が入っていません。国型のコミュニティスクールをしていないというだけで入っていません。「自分達がこんなに一生懸命やっているけど、コミュニティスクールとしては認められないような活動なのかな」と一言おっしゃっていました。私はそれに関して一言も返せませんでした。私達も変わることを恐れずに一歩前に踏み出す姿、カッコいい姿を子ども達に見せたいなと思っています。

○早坂氏

夢を語ることの大事さ、冒頭で伴さんにお話しいただきましたけれども。我々がそれぞれ違う立場、違う経歴、違う経験、違う専門性を持って一つのことに向き合う時、それぞれやはり見方、考え方が全然違う中で。それでも緩やかに繋がれていくのはもしかしたら「夢」というね、

旗が1本真ん中に立つときのかなとも感じると、この「夢」の大事さというのは、コミュニティスクールを語るときにも少し外せない要素の一つになってくる、そんな気がとてもいたしました。また最後のボランティアさんの言葉は刺さりますね。

○武田教育長

最初に今日話を聞いて感じたことは二つです。

一つは内発性の話。おっしゃる通りだなと。先生や地域の方が内からこうやりたいとか、ワクワクするということが大事だなと思うのですけれども。一方、この内発性を妨げているものは何かということを考えていかなければいけないと思います。もし、内発性を妨げているものが、先生達や学校にあるとしたらそれを取り除くのが行政の仕事だと思うのですけれども。比較的教育行政というのはどちらかというと先生達が学校の内発性を与えているものになってきたことがあるのではないかと。逆に先生達や学校のストレスになっている部分があるのではないかと。ことを反省するところです。

地域にはそれぞれ課題や状況があって、こうやればうまくいくというわけではなくて、それぞれの学校がそれぞれの地域に合った方法というものがあると思うのです。そうすると県教委としては、いろいろな事例を紹介していくのですが、教員の文化として成功事例を言いたがるというか、こうやったらこんないいことがあって、子どもがこんなに変わりましたということと言いたがりますが、それだけではなくてやはり失敗事例を共有していくということがとても大事なことのだろうなと。だから、失敗に寛容な教育社会にしていかないと、変わることを恐れずにチャレンジする人達というのはなかなか出てこないのだろうなということをおもいました。

それからもう一つは、今、塩原先生の話にもありましたけれども、少子化が進んでいて、特に子ども達の数々が年々減っていている学校は学校の存在理由が何かということ等が問われているわけで。そうすると、やはり学校は地域のアイデンティティというところと強く関係しているものだということがこの少子化の中で非常に分かってきていると思うのですが、意外とそのことを学校は知らないというか、学校が本当に地域を見ているのかというところで、先ほどお話あった本当に地域と共に教育課程を作っていくというところが、大事なのだろうなと思いました。

それでもう一つこの機会にお話をしていきたいと思えます。知事部局がやっている「信州学び円卓会議」というものがありまして、このようなメンバー、大学の先生から風越の校長さん、根羽の村長さん、フリースクールの関係者、信濃教育会の会長として私も昨年まで出ていたのですが、早く言えば長野県の教育に関わるいろいろな方々が、これからの長野県の教育は何を目指していこうかということで話をいただいた会議であります。その円卓会議から過日、他者と協働しながら社会の課題と向き合う新しい社会の作り手を育むために学びの「新しい当たり前」を共に創るというメッセージをいただきました。

そのメッセージの中で、知事と教育長は先頭に立って協力して取り組んでいくようにと提言をいただいたところであります。そして、ここでは六つのことを提言いただいています。

一つは「子どもたちが学校等でやりたいことを支える」。それから「先生達が学校でチャレンジしたいことを支える」。それから「一人ひとりの学びや得意を共に認め合う仕組みを検討する」。それから「中山間地を大事にしていく」とし、それから五つ目に、「『こどもまんなか社会』の実現に向けた様々な機関の連携・協働を進める」、そして「多様な学びの場を信州全体で支えるネットワークを再構築する」という提言をいただきました。これは県のホームページにありますので見ていただけたらと思いますけども。それを受けて、知事と私で「学び・教育改革に臨む私たちの決意～日本の学びの『新しい当たり前』を信州から創る～」ということで、共同メッセージを発出したところであります。

先ほど伴さんの話にも関係するのですが、これを今いろいろなところへ行って知事と私で分担をしてこういったことでこれからの長野県の教育を作っていきたいと。ついてはそれぞれの教育関係者に、それぞれのアプローチの仕方があると思いますけどもみんなで子どものために夢を見ていこうじゃないかという話をしたところであります。

そういった中でやはり反応としては知事部局と教育委員会がそれだけやるつもりなら、一緒に頑張っていきたいというような反応と、一方でそんな理想ばかり言っても現実はそうではないというお話もいただいているところでありますけども。ただ、先ほどの話に戻りますけども、内発的なその動機づけとは、やはり夢がなければ出てこない。何かこういうことをしたいよね、こういうのがいいよねと思わない人の中にワクワク感は出てこないだろうと想着いて。マスコミや新聞記者さんなどには知事がそこまで介入していいんですかというようなことを言われるのですが、そういう問題ではなくてそれぞれがみんな協力をして、長野県の教育を盛り上げていこうということで考えております。

是非、どこまでできるか分かりませんが、私は66歳でもうすぐ67歳になりますけども年を取ってきても何か挑戦している時が一番楽しいので、何かに向かって挑戦をしていくと、学校の先生も校長先生、教頭先生もみんなそれぞれが何か自分の目指すもの、あるいは地域の人達と共に夢を見て挑戦するというのを支えていきたいというように思いますので、これからもよろしくお願いたしたいと思います。

○早坂氏

長野県民でよかったなと、体が震える思いをいたしました。今、素敵な教育長からの宣言というかですね、夢を語れずして、どうやって現実を変えていくんだという熱いメッセージをいただけたところで、これが何か我々が立場を超え、何か一つ共有できる答えにもなり得るなというのを、今お話を聞いていてとても思いました。

○城村氏

長野県がウェルビーイングの実現を掲げているというところで私も賛同するところです。究極的にウェルビーイングは与えることかなと思っていて。また同時にその幸せを自分一人だけの幸せということではなく、その幸せを分かち合える社会・学校・地域というのが自分にとってウェルビーイングを実現した状態なのかなと。分かち合えるということが。そういった意味で、このコミュニティスクールも、これまで5回の議論の中を通して言うならば、学校の中で先生方だけで行っていた教育というものが社会・地域と分かち合っていく、その幸せを先生方だけが教育者としてその子ども達を教えるということを独り占めしないで、やはり地域の皆さんにも共有をしていく、幸せを分かち合っていく。それは決して負担というネガティブなものではなく。与えることができる、与えさせていただけるといのは地域人としてはとても嬉しいなと思っています。そのような社会がこれから長野県の中でできていけばいいなと思っています。

一点先ほど伴さんの方から昨日ボランティアの方々からこんな言葉があったというところ。私もそう言われたらちょっと切ないなと思っていました。私自身が高校の方で講師として関わっていますが、今6年目です。その中ですごく学校の先生方に対し思うこと一つあります。やはりお金がないですね。教育現場はお金がないから人を呼べないし、講師もお願いしないし、いわゆる私のような、ノーギャラでも何でもやるよという人でないとなかなか協力してもらえないということがあったりする。ただ、一つやはり思うのは、もう結論を言います。これは学校の先生方、現に今いますので。写真を撮っていただいて感謝状を送ってほしいのです。たったそれだけでも大分変わると思います。何十円でできます。私は5、6年現場に入っていますが、先生方が写真を撮るのは子ども達の写真ばかりです、生徒の写真ばかり撮るのです。

しかし、実際に地元の経済人達が学校教育の現場に入っていく時に欲しいのは、たかだか数千円の謝礼ではなのです。それでしたら、仕事をする方がお金を稼ぐことができますから。

なぜ経済人達が学校教育に関わりたいと思っているかと言うと、もちろん恩返しもあります。いろいろな教育的な思いもあります。また、そこでやはりメリットがあるとしたら、お金ではないのです。お金がないのを知っていますから。教育に予算がないので。でもそこに対して、児童・生徒達の前で地域の経済人として何か教育を与える、メッセージを伝えていく。生徒達がいて、その向こう側に自分が立っているその写真が1枚あるだけで、これで地元の企業の企業人達はそれだけで満足します。たったそれだけです。それが自身のSNSであったり、会社のホームページであったり、そこで表現できる。あるいは学校のホームページ、ブログなどでも今日はどこどこ会社の何々社長さんが来て、こんなことをやってくれましたというのが載るだけで、企業とすると取引先が検索したときに、この会社さんはこんな教育活動もやっているんだ、立派な会社だなというところに評価をいただける。何もお金だけを求めては多分、企業の人達は学校には来ないです。ただその仕組みが今学校の中にないなと思っています。そして1年終わった後でも、2年でも3年でもいいですが1枚感謝状を贈ってあげてほしいです。もうそれだけでいいです。地元のケーブルテレビやコミュニティ紙が来てくださるかもしれない。それだけでも企業の

方や地域の方々は学校にいくらでも入ってくれるだろうなと思っています。お金がない予算がないというところでどうも逃げがちですけれども、多分現状でもできることはあると思っています。ちなみに私はPTAをやっていますが、PTAの方の感謝状はよくあります。頑張ってくださいの方に。しかし、今我々が取り組んでいるのは、その役員さん、その保護者を理解して送り出してくださいという就業先の企業の方々には感謝状を贈る取組をしています。

私は保護司の方もしていますが若手保護司のフォーラムが法務省の方であって、そこでも話をしました。保護司さんに感謝状を贈るのではなくて、保護司を理解して送り出してくださいという就業先の企業に感謝状を贈りませんかということも提案させていただきました。たったそれだけ、何十円でできます。それだけでも学校教育であったり地域社会にそういったボランティアベースに関わるの方々というのは関わってくださると思っているので、そういったところでまずできるところからでも一つ一つ始めていただきたいなと個人的に思っています。

○早坂氏

できること大事です。本当に数百円でできる、しかも効果もあるということで繋がり続ける。非常に大事なポイントなのかなというところですよ。

○河西氏

本校のランドデザインです。塩原先生から子どもの尊厳を守るということを、どうやって位置づけているか。目指す教師像の一番最初に「生徒への尊敬の念を常に忘れない教職員」という言葉を載せてあります。これを説明するときには、ここができればやろうとしていること全てうまくいく、これがなければ何もできないというような話をしております。これを入れなくちゃいけない、あるいはこれがないから先生が関わるいろんな問題が学校で勃発するという話をしてくれたのは、大町方面で学んだある校長先生です。恐らく、塩原さんと一緒に学んだ方に私も新たに学ばせていただいたということかなと思い、これをお伝えしておきたいと。先ほど話もありましたし、それからコミュニティスクールにおいても、何においても教育活動においては、この意識がないと何も進まないだろうということは感じました。

○早坂氏

本当に素敵な先生がたくさんいらっしゃいますね、長野県には。それを実感させられました。

時間もこれで迫ってきているというところもありますので、座長としてのミッションとしてはこれをどこかに着陸させなければいけないのかなというところを最初考えていたのですが、この会議に先立った事前打ち合わせでも、県教委の指導主事の皆さんとお話させていただいたのですがここを無理くり一つの結論に落とし込むような形というのがそもそも我々の議論にとっては合わないのかもしれないし、あるいはコミュニティスクール、学校運営協議会で行われる熟議を考えると強いリーダーシップのもとで何かどこかに強引に結論を出すという形ももしかしたら違うのかもしれない。今日我々の議論がそれぞれ見えている世界をそれぞれの立場からより具体的に言語化して、全体のテーブルに載せた後、またそのテーブルに出たものをそれぞれが考え、ま

た現場に戻って行って、私達の生活がさらに、あるいは教育・学校・地域への関わりがより一歩踏み込んだものになることができれば良いのかな、そのようにも考えた次第でございます。

例えばというところで思い出した、インドの昔話に「群盲象を評す」あるいは「群盲象を撫でる」というお話があります。とても有名なお話なので、ご存知の方も多いのかなと思いますが。目が見えない人が6人、そこに初めて遭遇する象さんがやってくるというお話です。象さんはとても大きいので、目が見えない人にとって象の全体像を理解することはできません。どうするかというとペタペタ触るわけです。鼻を触っている人は「象か、初めて見るな、ヘビみたいな生き物だ」と言うし、足を触っている人は「象か、木みたいな生き物だな」というし、お腹を触っている人は「壁みたいな生き物」、尻尾を触っている人は「ヘビみたいな生き物だな」というわけです。みんな正解なわけです。ただ、全員がそれぞれの立場で見えるものを語っていて、自分が触っていないものについては想像を巡らすしかないわけです。

これはまさに我々が直面しているコミュニティスクールだけではなく、我々が対話を通じて何かを考えたり、一緒に答えを作ろうとするときに必ず直面する出来事になるわけです。

私がこのインドの寓話、昔話の好きなところは地域によってこの後の物語が派生していくパターンがいくつかあるのです。多くのパターンでは、このあと目の見える王様が現れるというパターンがあります。王様は、群盲、目の見えない人達に対して、「君達は部分的には合っているけれど、誰一人合っていない。全体像が見える私が教えてあげよう」と言って、その王様にみんながついていくという物語です。もう1個の物語は、王様は登場しません。その代わりに、目の見えない人達が対話を諦めないという物語です。ひたすらに対話をしながら、「こうだったらいいね」と夢を語り合いながら、自分に見えているものを人に伝え、相手から伝わってきたものを、もう一人の自分が経験している事実だとして受け入れていく。時に自分が触っている現実とは違う言葉に対しても、それを自分の一部として取り入れていく。そうやって対話を諦めなかった先に目の見えない人達によって象さんの全体像が浮かび上がるという話があります。

私は圧倒的に後者の話が好きで、またコミュニティスクールの実践は後者であるべきだとも思っています。

少し私事になりますが私は東京で生まれて、茨城県つくば市で学生時代を長いこと過ごし、ご縁あって長野県にやってきて今年で15年目です。家も建て、子どもも三人生まれて終の棲家として長野県を選んだ、外から来た人間が長野県の素敵だなと思うところを挙げるとしたらいくつかありますけれど、一つはこの自分の見えている世界を、お互い尊重し合って会話の中で物事を決めていこうという風土が、他の地域よりも圧倒的に対話風土が醸成されているということが素敵だなと思いました。対話を諦めない人達ばかりだなと。ただそれと同時に物事が決まるのがすごく時間かかるなとも思いました。王様はいないけれど、リーダーシップは必要だろうと思います。今日、教育長の武田さんから夢を語るんだというお話。また、知事と教育長の連名で学校変えていくぞと、教育を変えていくぞという前向きな夢が語られたということは、とてもとても

私が長野県を好きな理由を増やして下さったなと思っています。

これまでの議論に引きつけていくと目の見える王様はいないので私達は一人一人が自律していくしかない。自分の頭で考えて、自分達で決めていくしかないということは、5回のコミュニティスクール検討会で私達が共通にたどり着いたポイントの一つではないかと思っています。

また、繋がりの中で、我々の違い、この委員の中ですら、コミュニティスクールは大事だと思っている人間ですら様々な違いがたくさんありました。この違いは目を瞑るのではなく、むしろ活かす、楽しむという方向で、私達は少なくともこの場では繋がれたという実感があります。

これが学校の学校運営協議会であるとか、運営委員会の中で熟議として展開されれば、違いを活かした形で地域と学校はもっと楽しみながら、内発性に基づいて、面白いことができるのかなというのが我々の議論で示せたように思います。

さらに言えば、私達にできたこと、そんなに大きくないけれどあったよねっていう感覚、とにかく我々はそれぞれの意見に頷きながらはっとさせられながら、この5回のコミュニティスクール検討会を楽しみきった。これにおいて多くの方が深く頷いていただけたのではないかと思います。

違いを活かしながら自分の頭で考えて、違いを楽しんで繋がっていく。我々がこのコミュニティスクール検討会で見せられた姿勢そのものが、これからコミュニティスクールを進めていく上できっと大事な私達の答えになるのかな、そのように皆さんとの議論で感じさせていただいた5回の検討会でした。もう感謝しかありません。

本当にこの委員のメンバーとして一緒に時間を過ごせたことに心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

これが果たして着陸と呼べるのかどうかはまたこの後、県の教育委員会の皆さんと考えていきたいと思いますので、一旦これで5回の検討会を閉じさせていただきます。

○事務局

早坂座長ありがとうございます。

ここで検討会終了にあたりまして、武田教育長から一言ご挨拶申し上げます。

○武田教育長

どうも皆さんありがとうございました。昨年度から始まったこの検討会を、公私共にお忙しい皆さんに5回にわたり検討を進めていただき、大変感謝をしております。

私は2回参加させていただきましたけども本当にいろいろなことを考えさせられましたし、いろいろなことに気づかされたなと思います。早坂先生には座長として本当にお忙しい中、議論をまとめていただいたことに感謝をいたします。今のまとめも長野県の気質に合ったまとめ方、本当にありがとうございます。

今日参加している傳田さんですが、上伊那で産学官交流会いうものを作っています。私はこの会議が大好きでずっと参加しているのですが、これって何をやっているかという、上伊那

のそれぞれのところでキャリア教育、自分のできることに携わっている人が年1回集まって、「こんなことをやったんだ」「それで次はこんなことを目指していくんだ」と交流して、また1年間やってまた1年後に集まるという本当に素敵な会です。

私は、この長野県の教育をより良くしていくのは、上田市の生涯学習課長さんみたいな人達がそれぞれのところで子どものために何らかのことができることをやっていくと、ただやっていくことをやっぱり力に変えていかなければいけないので、大きな流れに変えていかなければいけないのでそれをネットワーク化したり、あるいはまとめたりしていくのが県教育委員会の仕事で、大きな力にさせていただきたいということを思います。

今の早坂先生のお話にもありましたけれども、長野県人というのは、大きな提灯にみんなが従っていく県民性ではなく、一人一人が小さな提灯を持って、それぞれの道を歩むのが長野県人のございまして、そういった意味で最後の早坂さんのおまとめにもありましたように、ここで学んだ方、あるいはこれを視聴して学んだ方、あるいは記録を見て学んだ方、それぞれができることを「子どものためだからやろうじゃないか」と言える人が増えていくことが、きっと素敵な長野県を作っていくのではないかと思ったところであります。

これから皆様方には公私ともお忙しいと思いますけれども、引き続き長野県のコミュニティスクールの推進にご尽力をいただき、ご協力いただければと思います。どうもありがとうございました。

○市村課長

皆様ありがとうございました。

それでは、これもちまして第5回コミュニティスクール検討会を閉会いたします。

本日はありがとうございました。